令和6年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立清和小学校

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学 力 向 上 × I C T 活 用	<p>1 授業改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業力向上の研修の実施 ・研究授業によるPDCAサイクル →指標:児童アンケート「授業がわかる」【目標値:90%以上】→【5月95%、11月89%】 <p>2 基礎学力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力における本校の課題の把握と改善 →指標:学力学習状況調査・みえスタディチェック 【目標値:国・県平均よりR6年度4月3ポイント上, R6年度2月とR6年度4月5ポイント上】 →【学調(6年生)は、国平均より、国語科-2.7、算数科-2.4 みえスタ(5年生)は、県平均より、国語科+5.7、算数科+1.0、理科+2.4 みえスタ(4年生)は、県平均より、国語科+7.7、算数科+17.5】 ・図書活用 →指標:イチオン本の年間図書貸出数 【目標値:目標冊数は低学年が30冊, 中学年が20冊, 高学年が15冊】 →【2学期末現在、目標を達成している学年もあれば、達成できていない学年もある】 <p>3 端末機器を生かした学び(授業・家庭学習)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業におけるICT端末の活用(協働的な学びにおける活用) ・児童の端末の持ち帰り(個別最適な学びに向けた活用 4年生以上毎日, 2、3年生週1回以上) →指標:児童アンケート「目的に合わせて活用」【目標値:90%以上】→【5月92%、11月90%】 ・ICT関係の研修の実施(意見交流としての活用, 家庭学習での活用) →研修後教職員にアンケート【目標値:満足度90%以上】→【91.4%の教職員が満足していると回答】 	<p>【授業改善】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業におけるPDCAサイクルは対象者が同じではないため、画一的にならないよう注意が必要。 ・授業参観において、英語の授業で、先生が子どものやる気をうまく引き出して感心した。 ・アンケートの回答が11月に下がるのは、5月には新学期を迎えて頑張ろうという精神があるが、11月になると気が抜けてしまうからだろうか。 <p>【学力向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度は、6年生も国平均を上回っていたが、今年度は4・5年生が県平均を上回っているものの6年生は国平均を下回っている。さらなる改善が必要。読書活動の推進が学力向上につながることもある。読み聞かせボランティアの活用等により読書への関心を喚起することで、各教科に及ぼす影響があるのではないか。また、先生型以外の第3者による推薦図書を採用すると、先生方の労力が減らせると思われる。 ・イチオン本の取組も学力向上につながると思う。 ・本は小さい時からぜひ読んでほしい。 ・各家庭で不要となった本を寄付していただくなどの手立てを検討してはどうか。 ・授業改善、学力向上、及び図書館活用は、数値上でも成果が出ている。図書館活用は他校に比べても活発だと聞いている。今後も改善の継続を。 ・図書室の利用については、学年が上がるにつれて減少傾向にあるため、本に親しみをもてる工夫が必要。 ・自らの目を見て、声に出して読み、手で書いて、覚えることが一番大切だと考える(不易の部分) <p>【ICT・端末活用】</p> <p>教材作成の手間を省け、その労力を他に回せることから、有効活用を進めるとよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最新の技術を利用することに反対はしない。今までの学習の方法とこれからのスタンダードをうまく取り合わせた素晴らしい学習ができるようになってほしい。 ・現在を生きる子どもたちに必要。ICTの活用が授業で行われることで、学力向上につながっていくと思う。 ・不得意の子もいるのかと思うが、今はスマホで遊ぶ子もいるので、そうでもないのかもしれない。 ・クロームブックでの個々の学びだけでなく、子ども同士の繋がりを大切に学習や生活を進めているとの言葉に安心した。 ・クロームブックを上手く活用して授業をしていると思う。持ち帰りについては、破損等の不安もあるが、これからも活用を進めてほしい。 	<p>【授業改善】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後も研究授業も含めて、学力向上の研修を実施し、子どものやる気を引き出せる授業づくりを推進する。また、研究授業によるPDCAサイクルにより、カリキュラムマネジメントを進める。 <p>【学力向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の分析を生かして弱みを克服し、学力学習状況調査で国平均を上回ることができるようにその学年に応じた基礎学力を確実に定着させていく。 ・図書館活用の取組を生かしつつ、言語活動の充実を図る。 ・学力そのものだけでなく、非認知能力の自己肯定感を育む取組とともに学力の向上につなげていく。 <p>【図書活用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせボランティアと連携を図りながら、新しい本とたくさん出会わせる。 ・イチオン本の取組を継続する。 <p>【ICT・端末活用】</p> <p>ICTのよさを活かしつつ、従来の指導方法も大切にしながら、場面に応じて適宜ICTを有効に活用していきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習端末持ち帰りでの家庭学習の内容の充実に向けて取り組む。 ・個別最適な学習を目指して複線型授業を少しずつ導入し、わかる授業の実現につなげていく。
	<p>授業改善について、全学年で国語科または算数科または人権の研究授業(全体研3本、学年部研4本)を行い、授業の成果と課題を明らかにし、授業力向上に努めた。児童アンケートでは、5月95%、11月89%が「授業がわかる」と回答している。</p> <p>基礎学力の向上について、学調・みえスタの結果から児童の課題を分析し、授業の改善を行った。学調(6年生)は、国平均より、国語科-2.7、算数科-2.4。みえスタ(5年生)は、県平均より、国語科+5.7、算数科+1.0、理科+2.4みえスタ(4年生)は、県平均より、国語科+7.7、算数科+17.5。</p> <p>図書活用について、今年度から読書内容を充実させるために、「全国図書館協議会選定図書」を指標として「イチオン本」を選定し、目標冊数を低学年が30冊、中学年が20冊、高学年が15冊と設定した。目標を達成している学年もあれば、達成できていない学年もある(予定)。今後「イチオン本」の貸出冊数を増加させるために、図書祭り等のイベントを工夫していく。年間図書貸出数は、どの学年も目標値を達成しており(予定)、成果が出ている。</p> <p>端末機器を生かした学びについて、授業においてオクリンクやオクリンクプラスを用いて協同学習として活用している。オクリンクプラスは、複線型の授業や図工の鑑賞などに有用なコンテンツであるため、活用する学年が増えつつある。3年生以上で毎日端末を持ち帰らせて、家庭学習で活用している。1、2年生も3学期以降、週1回以上持ち帰らせ、家庭学習で活用している(予定)。児童アンケートでも、5月92%、11月90%の児童が「クロームブックを目的に合わせて活用」と回答しており、成果が出ている。</p> <p>教職員の活用力アップについて、ICTに関わる研修を、校内研修会で各学期に実施した(予定)。研修後のアンケートでは、91.4%の教職員が満足していると回答した。今後は、特にオクリンクプラスの効果的な使い方について、実践的な研修会を実施していきたい。</p>		

<p>生活指導・人権教育</p>	<p>1 自分で判断し行動できる児童の育成 ・対話による問題解決 ・児童主体の啓発活動 →指標:児童アンケート「いじめはいけない」【目標値:100%】→【5月が99%、11月は97%】</p> <p>2 コミュニケーション力の育成 ・自分の考えを発表する場を保障 ・自分や友だちを大切に作る仲間づくり →指標:児童アンケート「友だちが困っているときに、助けることができる」【目標値:90%以上】 →【5月が95%、11月は92%】 「困っているときに助けを求めることができる。」【目標値:90%以上】 →【5月が84%、11月は79%】</p> <p>【成果と課題】 ・「自分で判断し行動できる児童の育成」については、対話による問題解決ができるよう、各クラスで日々取り組みや指導を行ってきた。また、差別に関する取り組みを各学年で取り組んだ。児童主体の啓発活動としては、児童会による啓発を行った。各クラスで、いじめをなくすためにできることを話し合い、放送で全校に宣言した。自分たちにできることを考えるだけでなく、放送で全校に共有したことやピンクシャツの画用紙に記入した宣言を掲示したことで、清和小学校全体でいじめをなくそうという意識をもつことができた。しかし、児童アンケート「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。」の項目について、5月は99%(どちらかといえばいいえが0名、いいえが2名)、11月は97%(どちらかといえばいいえが4名、いいえが4名)であった。 ・「コミュニケーション力の育成」については、人権教育目標を「自分や人を大切にし、つながり合える子」とし、人権課題を「コミュニケーション力」とし、各クラスで視点児童を決めて学級指導に励んできた。児童アンケート「友だちが困っているときに、助けることができますか。」の項目で92%と目標値の90%以上を達成している。しかし、「困っているときに助けを求めることができますか。」の項目では、79%と90%を下回る結果となった。また、どちらの項目についても5月より11月の値の方が低くなっていた。「どちらかといえばいいえ」「いいえ」と回答した児童を把握し、助けを求められる安心した学校、学級をつくっていくことが課題である。</p>	<p>【自分で判断し行動できる児童の育成・コミュニケーション力の育成】 ・「いじめはいけない」という意見が100%でないのが気になる。2~3%の児童について、どう進めていくか、継続的な努力が必要。 ・友だちが困っているときに助けたいと思う気持ちが育っているのではと良い。「助けて」と言えることも同じくらい大切だと思うので、なんでも言い合える関係性を築いていくことも必要と思われる。 ・友だちが困っているときに助けたいと思う気持ちが伝わるよう、学校だより等に載せてはどうか。 ・いじめはいけない。学校全体での取組のように、「私は困っています」と言えるようになる取組も考えていただきたい。大人でも、自分から「助けて!」とはなかなか言えないので。 ・いじめへの児童の意識は向上している。11月は5月に比べて2%減少しているが、問題ないと思う。 ・友だちが困っているときに助ける、困っている時に助けを求める。これを実行するのはとても難しいことだと個人的に思う。大人でもどこまですればいいか悩むので、親が率先してするべきかと思う。 ・他者との関わりによって自分も成長することを認識できる取組が必要。 ・困難なことにつづかったとき、必要な助けを求めるときに、学校、警察、市役所、児童相談所、友達、親など助けを求めるところはたくさんあるが、実際に声に出せることはあまりないのかもしれない。知識の差なのか、勇気の問題なのかはわからないが、出前授業などを通して、困ったときの相談窓口を子どものころから教えないと、大人になったとき困ることがあると思う。 ・学校アンケートの項目について、「どちらかといえばいいえ」「いいえ」の回答が増加している。難しい聞き取りになると思うが、そう回答した児童、個人個人からの聞き取りは行う必要があるのではないか。 ・児童アンケートに取り組むことに意義がある。それをもとにこれからもコツコツ取り組めば良いと思う。</p>	<p>【自分で判断し行動できる児童の育成】 ・「いじめをしてはいけない」ということを、引き続き児童に考えさせていく必要がある。具体的には、道徳の授業や人権学習、日々の声かけ、全校への呼びかけなどを今後も行っていく。 ・「いじめをしてはいけない」に対し、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と答えた児童を把握した上で、対応を継続する。 ・クラスで起こった事象に対して、当事者だけでなくクラス全体に問うていく機会も大切する。</p> <p>【コミュニケーション力の育成】 ・クラス作りや日々の関係性づくりを継続する。 ・コミュニケーション力を高めていくことが本校の児童の課題として捉え、各学級で取り組みを進めてきた。つながりチェックアンケートや学校アンケートなどを用いて、なぜ助けを求めることができないのかという理由を年度初めに把握した上で声かけをしたり、思いを聞いたりしていきたい。 ・困ったときの相談先として、友達や家族、先生たちはもちろんのこと、相談窓口関係のプリントやカード、スクールカウンセラーの来校日に関するプリントなどを配布した際に、伝えるようにしている。また、保健指導やいじめアンケートの際にも、誰かに相談することの必要性を伝えているため、今後も続けていく。</p>
<p>長欠減少</p>	<p>1 新たな不登校を生まない学校づくり ・子どもたちが安心していられる居場所づくり・学力保障 ・正しい児童理解と適切な対応 →指標:児童アンケート「先生や友だちに認められている」「学校が楽しい」【目標値:90%以上】 →【5月86%、11月81%】 →【5月87%、11月88%】</p> <p>2 不登校(傾向)児童への適切な支援 ・不登校対策委員会による組織的早期対応→指標:不登校対策委員会の【実施年5回】 →【実施100%の見込み】)</p> <p>・SC、SSW等の医療や福祉等との連携支援 →指標:長期欠席児童の年間登校日数【目標値:昨年度の出席日数以上の登校】</p> <p>【成果と課題】 ・「新たな不登校を生まない学校づくり」については、職員会議や週1回の打ち合わせで児童の情報共有を行ってきた。情報共有を行うことで、学級担任だけでなく、学校全体で気になる児童を見守ることができた。児童アンケート「先生や友だちに認められていると感じますか。」の項目で81%、「学校は安心してきて楽しいところですか。」の項目で88%であった。どちらも、5月より11月の値の方が低くなっており、目標値の90%以上も達成できていない。「どちらかといえばいいえ」「いいえ」が増えている。周りから認められていると感じ、安心して学校生活を送れるようにするために何をすればよいか考えて、日々意識していくことが必要である。 ・「不登校(傾向)児童への適切な支援」については、欠席し始めた児童がいたときに、教員同士の相談や共有、兄弟間での連携など、対応がすばやくできた。スクリーンやホワイトボードで欠席者やその理由も共有できた。</p>	<p>【長欠減少・不登校】 ・家庭訪問等により、本人の気持ちを喚起するなど、粘り強い働きかけが必要。どれだけの時間を割いて取り組めるかだが、多様な対応がある先生方にこれ以上の安易な提案ができない。 ・子どもだけでなく家庭への支援が必要な場合もある。学校がすべてを把握し対処するには、課題が大きい時もある。関係機関と連携した早期の対応を行う仕組みが必要。 ・教員間の情報共有による早期対応に加え、他校の好事例などを共有することも大切。 ・不登校への適切な支援において教員間の相談や共有等はできたという点だが、不登校の理由の共有にとどまらず、その理由の払拭までつなげることはできないのか。</p>	<p>【新たな不登校を生まない学校づくり】 ・不登校児童や家庭に、引き続き働きかけていく。学級では、授業規律を整えたり、クラスの雰囲気づくりを行い、安心して楽しく過ごせる学級を築いていく。</p> <p>【不登校(傾向)児童への適切な支援】 ・SLS、SSW、スクールカウンセラー等との連携を今後も継続する。必要に応じて、子ども家庭支援課と連携し、ケース会議を行う。 ・他校の好事例については、不登校担当者会などで聞いた話を還流する。 ・不登校の理由はそれぞれなので、その児童、家庭にあった対応をこれからも継続して行う。</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">地域連携</p>	<p>1 家庭におけるスマホ、ゲーム時間・家庭学習・読書時間の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PTAによる啓発や研修会に実施 ・家庭学習強化週間、ノーメディア週間による家庭への啓発 →家庭学習強化週間、ノーメディア週間の目標達成率【目標値：90%以上】 →指標：保護者アンケート「スマホ・ゲーム時間」「家庭学習」「読書時間」【目標値：昨年比10%改善】 →【前年度と比較して71%から73%と微増】 <p>2 地域人材の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校支援ボランティアの活用(安全安心・読み聞かせ・図書館整備・環境・学習支援等) ・地域ゲストティーチャーによる地域学習 →ボランティア活動人数【目標値：年間のべ活動人数1900人】→【12月1日時点で約8割の達成率】 <p>家庭における家庭学習の改善について、家庭学習強化週間を実施し、家庭へ啓発している。保護者アンケートの「家庭学習を学年×10分以上行っているか」という質問では、前年度と比較して71%から73%と微増しているが、10%改善には至らなかった。家庭学習強化週間の取り組み内容を時間ではなく質の向上をねらいとしたものに変えたのも理由の一つあると考える。学年にあったよりよい内容を意識した学習を目標時間以上できるよう、今後も取り組みを続けていく。</p> <p>家庭における読書週間の改善について、家庭で読書をしないと答えた保護者の割合は29%で、前年度と変わらなかった。家庭での読書時間を増やしていくためにも、ファミリー読書の取り組み方法を変えるなど改善していく必要がある。</p> <p>地域人材の活用については、環境ボランティアに継続的に協力いただき、除草や花壇の整備に携わっていただいている。また、読み聞かせボランティアも木曜日ごとに約10名ずつ協力いただいている。給食や教科等の支援をするボランティアについては、オンラインで募集できる体制を整えることで、概ね学校が必要とする支援をお願いすることができた。下校時の見守りボランティアについては、算所・三日市地域合わせては15名の方を中心に下校時の見守りを実施していただいている。地域学習について、学校運営協議会、地域の方のご協力のもと、今年度は4年生1回、5年生3回の実施ができた。</p>	<p>【家庭におけるスマホ、ゲーム時間・学習・読書時間の改善】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者のゲームへ考え方もあるので、家庭教育学級などで、ゲームやスマホの習慣化について情報交換の機会を持つとよい。 ・ノーメディア習慣の取組については、保護者・PTA・創徳中との連携が必要。 ・家庭学習強化週間は、中学校のテスト期間に合わせて行われているため取り組みやすいので良い。 ・ファミリー読書については、どんな本を読んだらよいかわからないという声を聞くことも多いため、おすすめの本の紹介などがもっとあると、親子で楽しめるのではないかと。 ・拡大学校運営協議会において、スマホの悪影響について講話を聞き、心配している。保護者も対象にした講習会等が必要ではないか。 ・学年×10分というアンケートの取り方からも、家庭学習が学校の教科の予習・復習を指しているように思われる。家庭学習には、おつかいやお手伝いも吹くものではないかと思う。 <p>【地域連携について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアはあくまでPTA中心で、という考えも根強い。それ以上の世代については老人会に頼るほか、フレイル予防の観点で働きかけてみるのもよい。地域の行事や役割の多さなどにより、学校への助力を行える量や機会も違ってくる。地域の祭り等において、学校から、管理職からのアナウンスがあれば地域としてもありがたい。 ・環境ボランティアの人材は高齢者が多いが、学校が目標を立て計画を進めてボランティアを呼びかけたら協力してくれる人はいると思う。 ・小学生にしかかかわることのできない地域学習があると思う。神社等の歴史、地域特有の風習や祭り、PTAバザーや餅つきなど、運営の苦労もあるが、良い経験を積める場である。 ・学校のホームページ発信が少ないのでは。工夫と活用をお願いしたい。 	<p>【家庭におけるスマホ、ゲーム時間、学習・読書時間の改善】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習強化週間は来年度も引き続き実施し、子どもが自主的に学ぶ習慣を身につけさせていきたい。 ・ファミリー読書はより子どもや家庭が積極的に取り組めるように改善していきたい。 ・外部講師を招いての子どもたちへのメディアリテラシーの学習を今後も継続する。 <p>【地域連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年度も学校運営協議会を6回開催した。継続して、地域との連携、関係者からの評価を得たい。 ・ボランティアの募集方法をもう少し柔軟に考え、PTAだけでなく、地域の方が参加しやすい方法を考えていく。 ・地域学習での協力に感謝し、来年度は内容をさらにより良いものにするよう、アイデアを出しつつ、継続していききたい。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">非認知能力育成</p>	<p>1 職員の非認知能力への理解向上と教育活動への位置づけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会提供資料を用いた職員向け研修の実施(4月、9月) ・主な行事、教育活動における非認知能力育成の位置づけ、整理とその実施 →4能力に関する児童アンケート項目 11月結果において5月比1ポイント以上の増加 <p>やりぬく力：めあてを意識して学習 →【5月85%、11月84%】</p> <p>学年の目安時間より多く学習 →【5月85%、11月78%】</p> <p>自制心：学年の目安時間より多く学習 →【5月85%、11月78%】</p> <p>ゲームやスマホを使いすぎない →【5月76%、11月69%】</p> <p>社会性：友達が困っているとき助けられる →【5月95%、11月92%】</p> <p>自分が困ったとき助けを求められる →【5月84%、11月79%】</p> <p>自己肯定感：先生や友だちに認められている →【5月86%、11月81%】</p>	<p>【非認知能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4つの力について、成果が見られた際、機を逃さず、褒め、認めることで成果につながるのではないかと。 ・調理実習ボランティアとして関わったとき、協力して作ることができていた。助け合いはできている。 ・2年生の学習にボランティアで関わったときは、どنگりに絵を描いている子に、「素敵ね、素晴らしい。いいアイデアだね」と声をかけると、とてもうれしそうだった。先生や保護者以外から褒められることが少ないのかもしれない。 ・指標について5月から11月にかけて減少しているため、さらなる啓発が必要と考える。 ・非認知能力の向上は大切だと思うので、学校における取組だけでなく、各家庭への啓発もあってよい。 	<p>【非認知能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・始業式や終業式で担当者が非認知能力の大切さについて知らせるだけでなく、担任がどの力がどこにつながっているのかを日常的に伝えていく必要がある。また、学校として大切にしていることを地域や保護者に積極的に発信し、啓発していく。 ・4つの能力に関わる児童アンケート項目の結果の否定的な回答に目を向け、課題である自己肯定感を育むために、「成果が見られた際に機を逃さず褒めること」を日比実践していきたい。 ・中学校区でも、似た傾向の課題があることが分かってきており、校区での取組や中学校区全体の家庭への啓発も考えていく。